『古代アメリカ』16, 2013, pp.31-42

＜調査研究速報＞

エクアドル南部におけるインカ国家の研究

― ムユプンゴ領域の発掘調査（2011）―

大平秀一
（東海大学）
森下壽典
（東海大学・早稲田大学）

1. はじめに

2011 年 8 月～9 月、エクアドル南部高地に位置するラ・ソレダー遺跡（標高 1800m）において発掘調査を実施した（図 1）。ラ・ソレダーは、広場、ウスノ（祭壇）、水をめぐる施設（バーニョ・デル・インカ）などが配されたインカ国家の遺跡である。遺跡からは、パサヘやマチャラといったエクアドル南部海岸域を肉眼で臨むことが可能であり、後述するミラドール・デ・ムユプンゴ遺跡と同様に、アンデス山脈西山系の一部であるムユプンゴ山系周辺域において、インカ国家の中心的役割を担っていた遺跡の一つと考えられる。

調査には、大平秀一、森下壽典、そして一部の期間ではあったが、Byron Camino（エクアドル文化庁）、Ivan Vallejo（モンテシナイ病院）が参加した。

2. 発掘調査にいたる経緯

1994 年、エクアドル南部におけるインカ国家と海岸部の関係を考察する目的で、インカの中心的都市であるトメバンバと海岸を繋ぐ主要な谷の一つ、フボーネス谷（ユンギーリャ谷）において一般調査を実施した。これにより、アンデス山脈西山系（ムユプンゴ山系）の最西端部分・標高 3200m の地点で、ミラドール・デ・ムユプンゴ遺跡（以下「ムユプンゴ遺跡」と略記）が確認された。この遺跡は、下方に広がるアンデス西斜面領域・海岸部を肉眼で臨める場所に建設されており、海岸部方向を睨んだ、インカ国家の重要な施設であると判断された。ムユプンゴ遺跡は、1995～1998 年の 4 シーズンにわたって発掘調査が実施され、複数回に及ぶ人工的な破壊を伴って建設途上で放棄されていることが明らかとなった［Odaira 1999］。

2001～2002 年の 2 シーズンには、ムユプンゴ遺跡周辺域において一般調査を実施し、ラ・ソレダー遺跡をはじめ、インカ国家によって建設された多くの施設を確認した。これらの中には、水をめぐる施設（バーニョ・デル・インカ）、インカ道、トウモロコシ畑、神観念を伴う膨大な数の加工さ

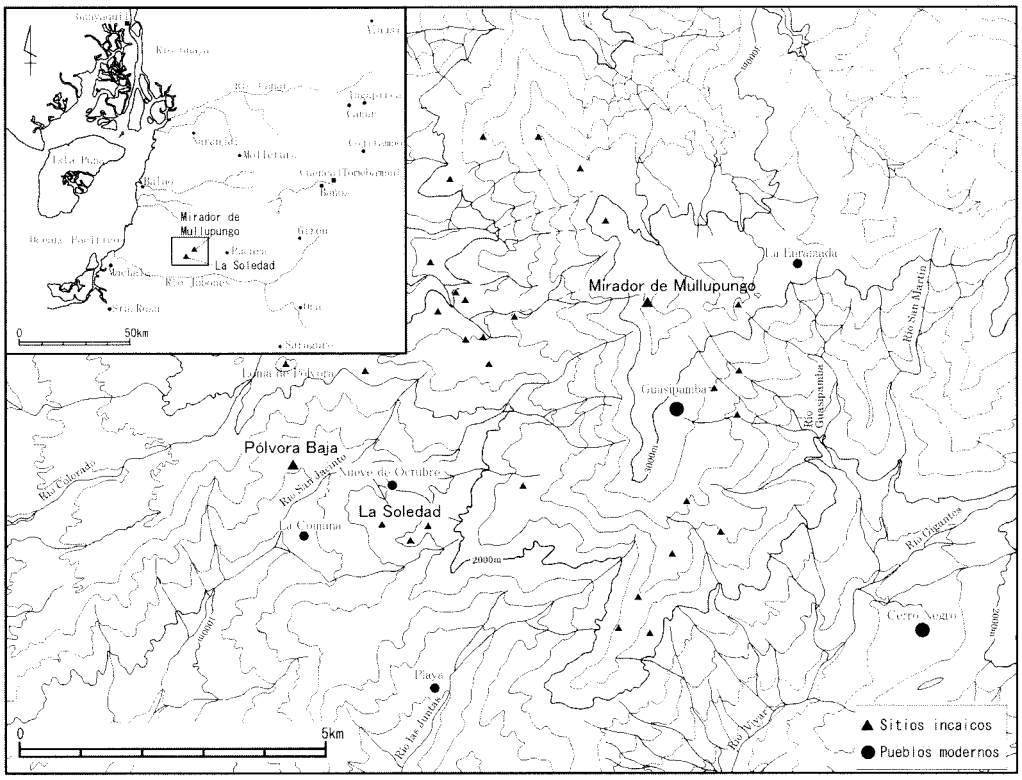

図１　エクアドル南部全図・調査地周辺図

れた岩（ワカ）、テラス化・整地された多くの聖なる山や丘、マチャイ（遺骸の安置場所）、そして概算で3000～5000基におよぶ「土壙」（墓）などが含まれている［Odaira 2005］。この「土壙」は、墓域のように一か所に集中して認められるものではなく、極めて多様なゾーンにおいて、見晴らしのよい丘の上や斜面、尾根上などに配されている。さらに、インカ期以後に構築されていること、径1～1.5m程度、深さ1～2m程度でのシンプルな掘り込みであること、掘り込んだ際に出た廃土を利用してすぐに埋め戻されていること、埋め戻す際に蓋状の石あるいは石組みを上部に配していること、儀礼行為を行った痕跡が認められること、などの特徴を有している。こうした特徴とムユプンゴ遺跡で得られた成果を併せて考え、この領域に何らかの大規模な武力抗争が生じ、これらの「土壙」はその犠牲者を埋葬した墓ではないかという仮説的解釈がなされた［大平 2003］。しかし、この一般調査において、5か所で計10基の発掘調査を実施したものの、「土壙」からは人骨は一切出土せず、その仮説を実証することはできなかった(註1)。

続く2003～2006年の4シーズンは、ラ・ソレダー遺跡ならびにその周辺域で発掘調査を実施した。その結果、ラ・ソレダー遺跡では、一度建設した儀礼施設を埋め戻してテラスを設け、その上に簡易的に短期間生活し、そのまま放棄されていることが明らかとなった。おそらく80年にも満たないインカのオキュペイションの中に、少なくとも2時期が明瞭に確認されたことになる。さらに上述した「土壙」の発掘も継続して実施したところ、人骨そしてアリバロ型壺をはじめとする土器・金

属製トップ・針・ピンセット、石製／貝・骨製／ガラス製ビーズなどの副葬品を伴うものが確認され、「土壙」がインカ国家側に属する人々を埋葬した墓であることが実証された。しかも、カット・マークを伴う人骨、頭部に対して下肢の位置が逆になっている事例、指の骨のみが出土した事例などが確認され、自然死した者を埋葬した通常の墓とは異なる、極めて不自然な様相を呈していた。こうした墓の特徴に、ムユフンゴ遺跡ならびにラ・ソレダー遺跡で得られたデータを考え併せれば、ムユフンゴ領域では大規模な武力抗争が生じ、多様なゾーンで犠牲となったインカ国家側の人々が、緊急的に埋葬された墓であると解釈された［大平 2004, 2005a, 2006, 2008a, 2008b］。

周知の通り、スペイン人が書き残したクロニカには、エクアドル領域におけるインカ国家と地方社会間、あるいはアタワルパとワスカル間において、1 万人を超える死者が生じた大規模な武力抗争に関する記述が多く認められる[注2]。ただし、それが史実であったこかどうかは、先住民自身が残した唯一の第一次資料ともいえる物質文化／遺跡資料を通して確認されたことはない。もちろんその存否は、アンデス先住民像あるいは「インカ帝国」像をめぐる問題にも、深く関与してくる。この点において、調査地で得られた資料価値は決して低くはない。

しかしながら、ムユフンゴ領域において、インカを襲撃した社会の特定をはじめとする武力抗争の詳細、犠牲者の詳細（インカ国家の施設に居住していた者をめぐる情報）などに関して理解を進め、インカ国家によるムユフンゴ領域の開拓・拡大の諸相を具体的かつ実証的に提示するためには、墓を中心としてさらなる発掘調査を加えてデータを蓄積していく必要があった。以上のコンテクストにおいて、2011 年夏季には、ムユフンゴ領域の中で特にラ・ソレダー遺跡の墓を中心として発掘調査を実施することとなった。以下に、その成果の概要を報告する。

3. 墓の発掘

2011 年の調査では、ソレダー遺跡の広場北東方向およそ 500m の地点に位置する LIB 区、同じく広場北方約 1.5km に位置する LRB 区、さらには広場南東およそ 1km の地点に位置する LH 区において墓の発掘を行った（図 2）。LIB 区ならびに LRB 区では、人骨も副葬品も出土しなかった。

1) LIB 区

LIB 区は、セロ・ヘンカルの裾野から下る一つの尾根の下方に位置している。墓が構築された場所からは、ロマ・デ・ホルボラ、セロ・ギリリウといった、インカ時代に信仰の対象となっていた山々を見晴らすことが可能である[注3]。この地区では、LIB-TU1 と LIB-TU2 の 2 基の墓の発掘を実施した。これらの墓の南側上方には、中央部分から二つに割られたような形に加工された大型の岩（ワカ）が複数構築されている（写真 1）。

LIB-TU1 は、これまでの事例と同様に、表土から 30cm ほどの落ち込みが認められ、地表から墓の存在が確認された。地形等を考慮した上で、墓穴を囲むように 200cm×200cm の発掘区を設定して、まずは墓穴の北側を半切した。その結果、表土下 10cm 程度のレベルから石が出土し、その下方から 25cm 程度の深さにわたってカーボン小片が連続的に出土した。しかしながら、その下方では大きな変化をみせず、そのまま底にいたった。その後に、発掘区の南側半分全面を掘り下げ、墓穴のプランが明瞭に確認できるレベルにいたらせ、それからセクションと平面の情報を基に、墓穴

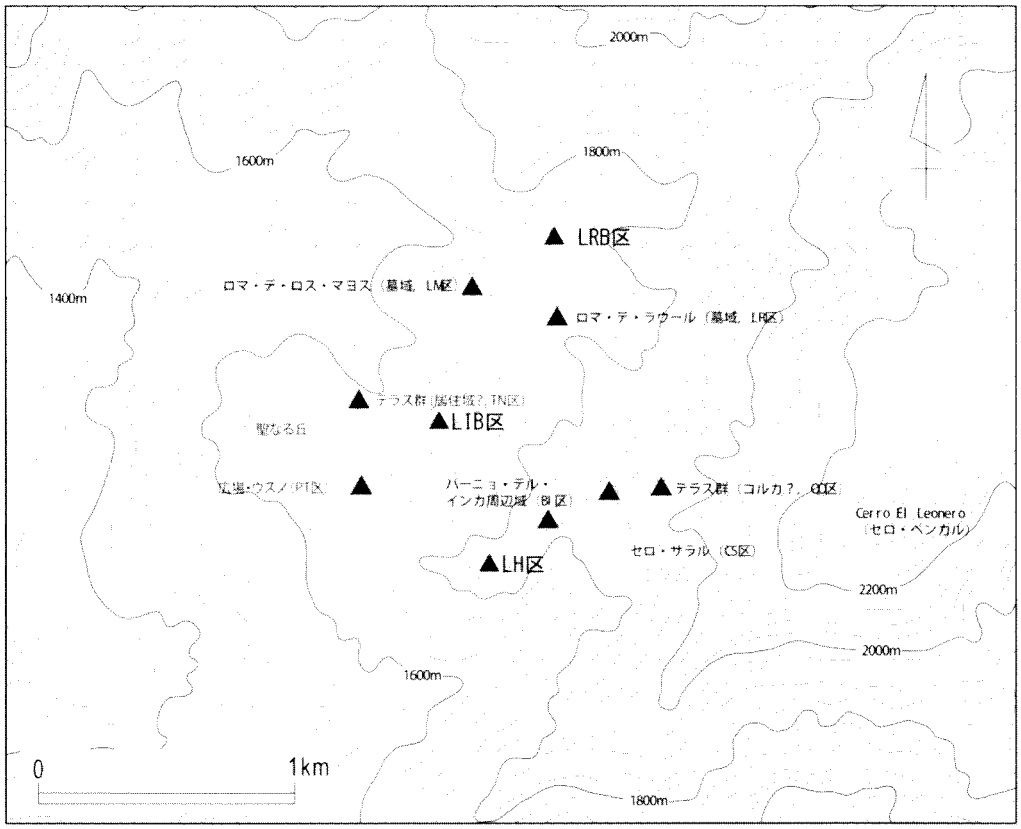

図２　ラ・ソレダー遺跡地形図

の内部のみを掘り進めた。墓穴からは、表土下 10cm～45cm のレベルでさらに石が出土し、その下方にはカーボン小片が確認されたが、人骨や副葬品は出土せず、そのまま底にいたった（写真 2)。LIB-TU1 は、深さが約 65cm の比較的浅い墓であった。墓穴内部の土はサンプルを取り、現在土壌分析を実施している途上にある。墓穴から出土したカーボン小片は、埋葬に際して、何らかの儀礼を行った痕跡である可能性もあるが、それを実証するデータは得られていない。

LIB-TU2 は、LIB-TU1 の南側およそ 10m の地点に構築されている墓で、そのさらに南に隣接して、加工の施された小さな岩が認められた。この墓も、やはり 30cm ほどの表土の落ち込みによってその位置が同定された。発掘は、その落ち込みを中央部に配するように、南北 240cm、東西 200cm の発掘区を設定してなされた。その結果、墓穴の中央部付近ならびに北東エッジ部分に、比較的大型の石が配されていることが確認された（写真 3)。しかしながら、この墓からも人骨や副葬品は出土しなかった。墓穴の形は、南側が深く掘り込まれており、いびつな形を呈している。この穴の深さは、プラン確認面より約 70cm であった。

なお、この発掘を通して、南側に隣接している小さな岩の周囲が、おそらく加工を施す際に掘り込まれ、その後にこげ茶色土を詰め込んで床を構築している状況が確認された。この墓は、その床・構築層を切って掘り込まれていた。よってこの墓は、インカの人々による景観の整備・儀礼的空間

の建設以後に構築されたと判断される。

2) LRB 区

LRB 区は、2005～2006 年に人骨や副葬品を伴う複数の墓を検出した LR 区の北側下方に隣接している。東側および北側には、ケブラーダがはしっており、北側正面には岩肌が露出した丘が認められ、その西側にはセロ・ギリリウならびに東側にはロマ・デ・ラス・ケマスといった聖なる山を臨むことができる。この地区では、LRB-TU2、LRB-TU3 の 2 つの墓の発掘を行った [註4]。

LRB-TU2 は、LR 区から北方に下っている斜面に設けられた奥行 4m ほどの小テラスの上に構築されている。この墓は、表土の落ち込み、ならびに墓穴の中に配されていたと判断される長い石の一部が露出していたことによって、その存在が同定された。まず、墓穴の落ち込みを中央部に置くように、200cm×200cm の発掘区を設定してなされた。墓穴のプランを確認する過程で、この墓が盗掘を受けており、表土に露出していた長い石も、その盗掘に伴って掘り出されたものであることが明らかとなった。発掘の結果、この墓の盗掘は上層～中層にいたっていたが、下層には及んでいなかった。しかし、この墓からは人骨・副葬品は出土しなかった。墓穴の深さは、プラン確認面から 220cm であった。

一方、LRB-TU3 は、TU2 の北側下方約 30m に位置し、北側に舌状にのびる尾根に設けられた小テラス上に構築されている。起伏・傾斜の激しい土地に設けられたテラスは、現在、家畜として飼われている牛が寝そべる場所になっているため、墓の構築に伴う表土の落ち込みはほとんど認められなかった。墓の同定は、土地主から得られた情報に基づいてなされた。

発掘は、想定される墓の位置を囲むように、200×200m の発掘区を設定し、まずはプランを確認するため、発掘区の全面を掘り下げた。その結果、表土下 25cm のレベルで、墓穴のプランが明瞭に確認された。それから発掘区の北側半分全体を、穴の内外を見極めながら底の下方まで掘り進め、その後に南側の穴の内部のみの発掘を行った。この発掘により、墓穴の上部に石を配している状況が確認されたが、人骨片や副葬品は一切出土しなかった（写真 4）。墓穴底部付近の土壌はサンプルを採取し、現在土壌分析の途上にある。この墓が構築されているテラスには薄黄土色土が堆積しており、その土からは比較的多くの土器片が出土した。これらはインカ時代に属するもので、テラスの構築に際して投げ込まれたものである。この墓は、この構築層を切り込んで構築されていた。

3) LH 区

ソレダー遺跡の広場とウスノは、二つの聖なる丘に挟まれた細い尾根上に構築されており、ワイナピチュとマチュピチュに挟まれた尾根上に建設されているマチュピチュ遺跡と同質的な構造を呈している。広場北西方向に位置するテラス化された丘のピークにはワカが配されており、儀礼空間が形成されている。一方、広場南東側の丘は、現在の村の墓域となっており、目に見える遺構は確認できていないが、広場側の断崖に白色の岩に加工を施したワカが認められ、インカ時代にはやはり聖性を帯びた丘であったと判断される。

LH 区は、この広場南東に位置する丘のさらに南東方向に隣接する丘で、その北側下方には、水をめぐる施設（バーニョ・デル・インカ）を見下ろすことが可能である。丘のピーク付近に多くの墓穴が認められることから、住民から「穴の丘」（Loma de los Huecos）と称されている。この丘の

写真１　LIB 区　ワカ（聖なる岩）

写真２　LIB-TU1 石出土状況

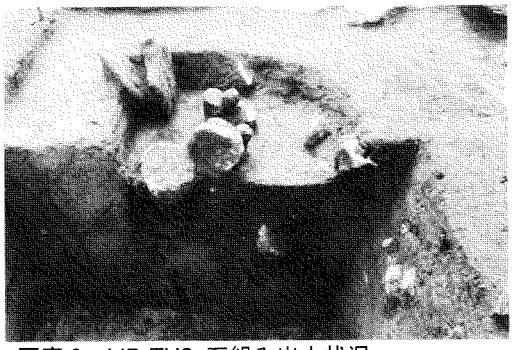

写真３　LIB-TU2 石組み出土状況

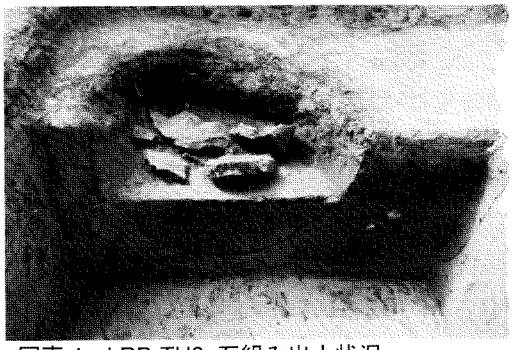

写真４　LRB-TU3 石組み出土状況

写真５　LH-TU3 半切セクション

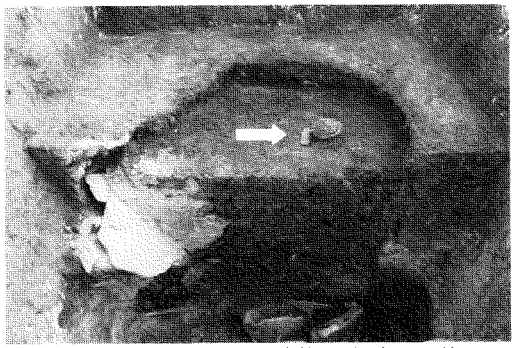

写真６　LH-TU3 カエル装飾付浅鉢出土状況

写真７　LH-TU3 墓室の蓋石出土状況

写真８　LH-TU3 底部の石囲いと歯の出土状況

ピークからは、ペンカル、ティグレロ、ギリリウ、ラス・ケマス、ボルボラをはじめとする神観念が付与されていた山々を見渡すことが可能である。2002 年、LH 区のピークにおいて 2 基の墓の発掘を実施したが、その際には人骨・副葬品は出土しなかった。2011 年には、ピークから北東方向にやや下った斜面上に構築された LH-TU3 と LH-TU4 の 2 基の発掘を行った。

3)-1　LH-TU3

LH-TU3 は、30～40cm ほどの表土の落ち込みにより、その存在が同定された。落ち込みの深さと面積がやや大きいことから、これまでの知見より、比較的大型の墓穴が掘られていると想定された。発掘は、表土の落ち込みを東西ラインで半分に切るように、南北 80cm×東西 200cm のトレンチを設定して、墓穴の北側を掘り進めた。その結果、表土下 10cm 程度のレベルで、表土の落ち込み部分の東側から、石の小塊を含む極めてコンパクトなピンク色土の堆積が確認された。このピンク色土は、表土下約 40cm のレベルで 1 辺 60cm ほどの明瞭な方形プランを呈し、表土下約 150cm のレベルまで堆積しており、下層からは大型の平石が出土した。一方この西側に隣接する表土の落ち込み部分では、上層に土塊が堆積しており、その下方からは手でも掘り込めるほど締りのないこげ茶色土が堆積していた。これを除去すると、表土下約 180cm のレベルで、平石を垂直的に立てた状態で配していることが確認され、表土下約 205cm のレベルから長い骨の一部が出土した（写真 5)。

この墓に埋葬のコンテクストが確認されたため、南側に南北 110cm、東西 200cm の新たな発掘区を設定して、墓穴のプランを明瞭に確認できる面まで掘りさげた。その後に墓穴内部に堆積した締りのないこげ茶色土を掘り進めると、西側に石の投げこみが確認され、プラン確認面より約 30cm のレベルで、カエルのアップリケが口縁部に施された黒色の浅鉢が 1 点出土し、さらにその直下から、まったく同じ特徴をもった別個体の浅鉢が、底部を上に向けて、割れた状態で出土した（写真 6,14)。

底部付近にいたると、コの字状に配された石囲いが検出され、その周辺を慎重に掘り進めると、石囲いの東側から歯ならびにガラス製ビーズが出土した（写真 8, 16)。しかしながら、頭骨は一切残存していなかった。さらに石囲いの中からは、長い骨の破片、そしてリング付きのトゥプが出土した（写真 9, 15)。コの字状に配された石囲い内部の最下部には、二枚の平石が並べて敷かれており、その下部には小穴が構築されていた（写真 10)。小穴には、何らかの有機質の物質が変化したと考えられる極めて締りの悪い粉状の物質が出土した。小穴のスペースから考えて、納められていたのは織物の可能性がある。

発掘現場において、Ivan Vallejo により骨と歯の分析がなされ、被葬者は 10 歳前後の子供と考察された。残存状況が悪く、骨から性差を同定することはできなかったが、トゥプを伴っているため、被葬者は女性と判断してよいであろう。この被葬者の埋葬姿勢は不明瞭であるが、胸の周辺に身に着けられていたと考えられるトゥプ、そして歯ならびにビーズの位置から、頭部を東側に向けていたことは明らかである。

この墓は、最初に最大で径 1m 程度の円筒形の穴を下方に掘り込み、その後にその穴の下部から西側に向かって墓室を掘り込んだ、ブーツ型の構造で構築されていたことが明らかである。ピンク色土は、最初に掘った穴に詰め込まれた土で、下層で出土した大型の平石は墓室の蓋の役割を果たしていた。しかしこの石蓋は、墓室内の土が柔らかったために、ピンク色土のブロックと共に墓室

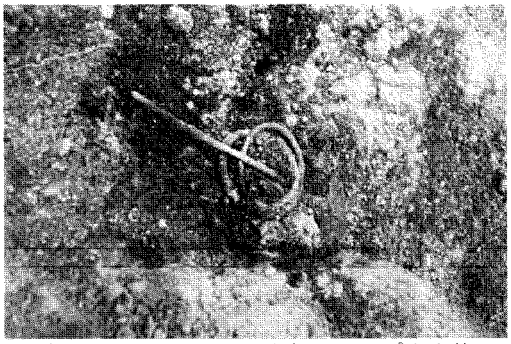

写真 9　LH-TU3 石囲い内部　トゥプ出土状況

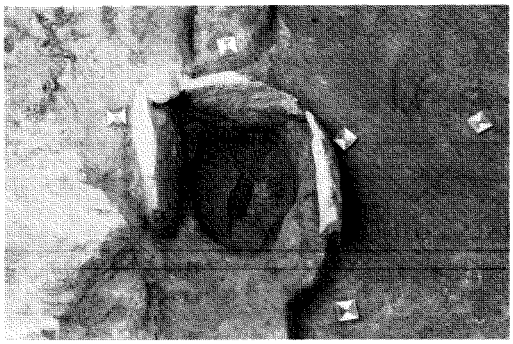

写真 10　LH-TU3 石囲い内底部　石蓋

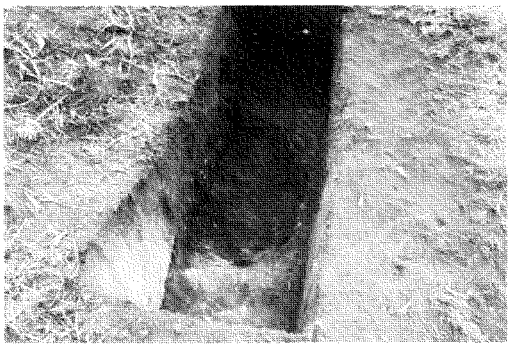

写真 11　LH-TU4 半切状況

写真 12　LH-TU4 墓室の蓋出土状況

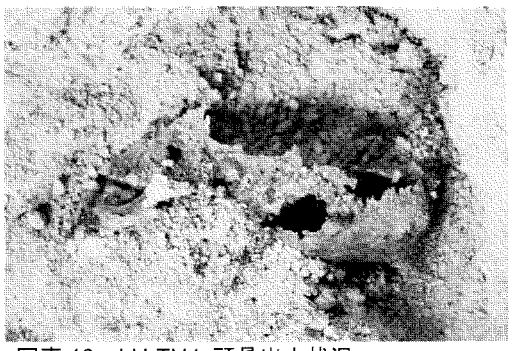

写真 13　LH-TU4 頭骨出土状況

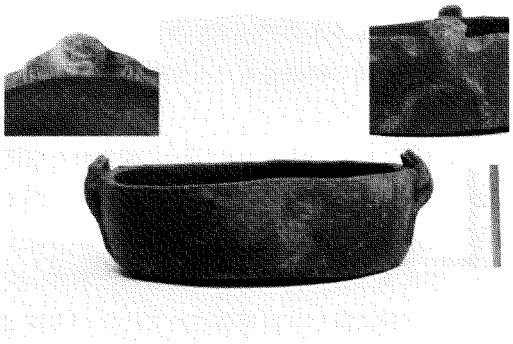

写真 14　LH-TU3 出土 カエル装飾付き浅鉢

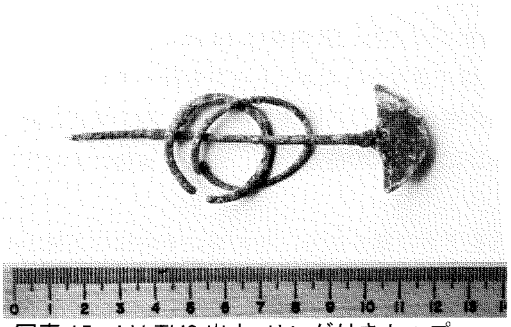

写真 15　LH-TU3 出土 リング付きトゥプ

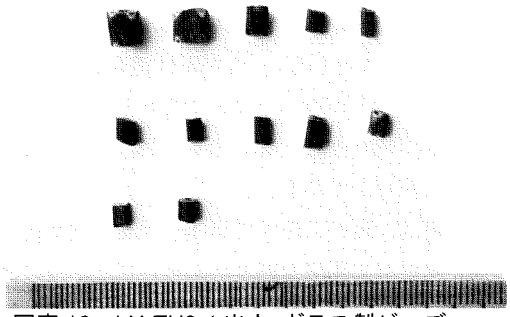

写真 16　LH-TU3,4 出土 ガラス製ビーズ

側に崩れたことが明らかとなった（写真 5～7）。表土の落ち込みは、墓室の天井部分の厚さが不十分で、長い年月を経て崩れ落ちたために形成されたものである。ブーツ型を呈しているにもかかわらず、墓室にはこげ茶色土を投げ込んで埋め戻されていることは、極めて不自然である。加えて、副葬品の土器は遺骸の脇に置かれずに、墓室内に土を埋め込み終える寸前に、投げ込まれていることも極めて不自然と考えざるを得ない。なお、スペイン侵入以前のアンデスには存在しなかったガラス製のビーズが出土していることから、この墓が構築されたのは、植民地時代と明瞭に判断される。

3)-2　LH-TU4

LH-TU4 は、LH-TU3 の北方およそ 5m の地点に構築された墓で、やはり表土の落ち込みによってその存在が確認された。発掘区は、南北 100cm、東西 220cm のトレンチを設定し、東西ラインで墓の落ち込み部分を中央から切るように配した。掘り進めていくと、表土下 20cm 程度のレベルにおいて、明瞭な墓穴のプランが確認された。またその東側に隣接して、小石を含む白色土の堆積が確認された（写真 11）。この白色土は、表土下 130cm のレベルまで継続し、その後に地山にいたった。一方、墓穴内部には、LH-TU3 と同様に、極めて締りのないこげ茶色土が堆積しており、下層には地山と同質の白色土が堆積していた。表土下 170cm のレベルにおいて、この白色土中から、長い骨の一部が 2 片出土した。セクションの観察により、この墓は LH-TU3 と同様に、最初に下方に穴を掘り込み、その穴の下部から、西側にむかってドーム状の墓室を構築していることが明らかとなった。

その後、このトレンチの南側に南北 100cm、東西 220cm の発掘区を設定し、発掘を進めた。その結果、最初に掘り込まれている穴が方形を呈していることが明らかとなり、墓室との間には計 3 枚の薄い平石を配して、蓋をしていたことが明らかとなった。ただしこの蓋の一部は、LH-TU3 の事例と同様に、墓室内の土が柔らかいため、墓室側にすべり落ちた状態で出土した（写真 12）。墓室中の土を除去すると、北側トレンチで確認された人骨と同じレベルから、頭骨、背骨、下肢の骨の一部が出土した（写真 13）。頭骨の周辺からは、その下方も含めて、やはりガラス製のビーズが出土した（写真 16）。その位置から、これらは、被葬者が身に着けていたものと明瞭に判断される。被葬者は、頭を西側に向け、頭部・体の右側を下方にして、膝を折り曲げた姿勢で埋葬されたと判断された。年齢はおよそ 15 歳前後と推測された。残存していた人骨から、性差の特定は困難であったが、出土遺物より女性の可能性が高い[註5]。

LH-TU4 も、LH-TU3 と同様にブーツ型の墓が構築され、ドーム状の墓室が構築されていた。アンデス地域において、こうした形状の墓では座位屈葬のケースが多い。しかし、この墓では明らかに側臥屈葬が取られており、加えて墓室が構築されているにもかかわらず、その空間には、わざわざ狭いスペースから土を投げ込んで埋め戻されている。こうした特徴は、この墓が通常の墓とは異なる特異な状況を呈していると考えざるを得ない。さらに頭骨は、硬質の天蓋部分は割れて崩れ落ちているにもかかわらず、比較的柔らかい後頭部の骨はそのまま残存しているため、土圧によって押しつぶされたと考えるには、極めて不自然な状況を呈している（写真 13）。被葬者は頭骨が砕けるほど、頭部に激しい殴打が加えられた可能性も否定できない。今後、さらなる分析を加えていく必要がある。LH-TU3 と同様に、ガラス製ビーズが出土していることから、この墓が構築されたのは、

植民地時代と判断される。

4. おわりに

発掘にいたる経緯で述べたように、調査地の多様なゾーンで確認される墓は、インカが何らかの社会集団に急襲された際の非常時の墓と解釈することが可能であった。2011 年度に発掘し、人骨・副葬品を伴っていた LH-TU3、LH-TU4 も、やはり通常とは異なる、特異な状況を呈していた。加えて、これら二つの墓はブーツ型を呈しており、調査地における非常時の墓としては、新しいタイプであった。ムユプンゴ領域におけるこれまでの調査で、ブーツ型の墓が 1 基確認されている。ただしこれは、インカ期において、水路あるいはバーニョ・デル・インカの建設時に捧げられたと考えられる若年者の生贄（カパクチャ）が埋葬されたものである［大平 2005b; Odaira 2009］。その構築は極めて入念で、もちろん墓室内に土は投げ込まれておらず、その規模も LH 区の墓のおよそ 1/2 に過ぎない。よって、LH 区の植民地時代の墓とは、まったく異なる特徴を呈している。唯一、両者の共通点を見出そうとすれば、被葬者が若年者であるという点である。今後、非常時に構築されたこのタイプの墓がもつ意味を考える上で、この共通点には留意する必要がある。

インカ国家の「行政センター」に居住していた社会集団の具体像に関する考古学的データは、極めて少ない。その最大の理由は、「行政センター」に墓域が存在しないためであろう。もちろん、ミティマエスのように、出自の場を離れて移動させられて労働力を提供していた集団が、一定期間の労働力奉仕の後に、元の共同体に戻ったり、周辺域に新たに村を形成したと考えれば、「行政センター」内部に墓域が構築される必要はない。この点において、特異な状況下で、膨大な数の墓が残存したラ・ソレダー周辺域は、インカが新たに開拓・拡大した領域に住まう社会集団の具体像を探る上でも、重要な資料となり得る。2011 年度の調査で得られた資料より、ラ・ソレダー遺跡の中には、子供・若年者も居住していたことが明らかとなった[註6]。

人骨が出土しなかったものの、LIB 区ならびに LRB 区の墓の構築は、遺跡の放棄に近いラ・ソレダー遺跡の終末期であったことを示唆している。というのは、インカの人々の世界観に見合うように聖なる岩を加工して整地した場所、あるいは何らかの目的で構築されたテラスを切り込んで墓が構築されているからである。おそらく、複数回に及んだ大規模な襲撃を経て、ラ・ソレダーならびにムユプンゴが配されたゾーンは放棄されたものと考えられる。その放棄ならびに武力抗争は、LH-TU3 ならびに TU4 の被葬者が身に着けていたビーズがガラス製であることから、植民地時代に及んでいたことが再確認された。これまで仮説として提示してきたように、このゾーンのインカの人々を急襲したのが、隣接する海岸部で強大な力を誇っていたプナ人の社会、あるいはクスコに基盤をおくワスカル派の人々であったとすれば、ムユプンゴ領域におけるインカ国家のオキュペイションの終焉には、植民地時代にいたっても継続して生じていた先住民間の大規模な武力抗争が多大な影響を与えていると考えられ、「発見」・「征服」＝「インカ帝国の滅亡」といった、ステレオタイプ的な歴史像に再考が求められることになる。

2011 年の調査においても、残念ながらインカを急襲した社会集団を特定・実証できるような資料は得られなかった。その急襲の具体的状況を示す資料も、まだ不足している。また人骨を含む墓と、まったく人骨が残存していない墓が認められる理由も明瞭になっていない。今後も、発掘調査を継

続して実施し、資料を蓄積していく必要がある。

【謝辞】

2011 年の調査は、科学研究費補助金（基盤研究 B［海外学術調査］、研究課題名:「エクアドル南部におけるインカ国家の拡大をめぐる実証的研究」、研究課題番号：23401032、研究代表者：大平秀一）によって実施された。また、日本国内におけるデータ整理・分析の実施に際して、東海大学文学部研究教育補助金を受けた。ここに銘記して、皆様に深謝申し上げます。

註

（註 1） 国際学会で、この土壙が食料の貯蔵穴ではないかという意見を度々受けたが、本文中に述べた土壙の特徴は、その意見・解釈を明らかに否定している。

（註 2） 事例を挙げると、インカに関する著名な記録を残しているシエサ・デ・レオンは、オタバロ、カヤンベ、コチャスキなどエクアドル北方の主要な民族集団とインカの戦いに関して、「（ワイナ・カパックは）彼らの首を切り、湖に投げ込むように命令した。殺害された多くの者の血はすさまじく、水が元々の色を失い、濃い血以外何も見えなくなった」と述べている［Cieza 1943 [1553]: cap.68］。同様に、エクアドル南高地ロハ県に相当するパルタ族の領域で生じた、ワスカル軍とアタワルパ軍の戦いに関して、「両軍で 35000 人以上の死者が出、負傷者も多かったという」と述べている［Cieza 1943 [1553]: cap.74］。

（註 3） ロマ・デ・ポルボラの尾根の一部において、若年者の生贄（カパクチャ）を埋葬した墓が確認されている［大平 2005b; Odaira 2009］。

（註 4） 表土の観察から、LRB-TU1 と命名したものは、発掘の結果、近代以後に支柱を建てるために掘りこまれた穴と明瞭に判断されたため登録を抹消した。

（註 5） これまでムユプンゴ領域で得られている資料では、ガラス製ビーズを伴う墓の被葬者は女性が多い。

（註 6） インカ王を配した社会集団パナカが所有していた財産・施設において、出自の共同体から切り離されてパナカに専属的に従属していた、ヤナという労働者のカテゴリーが存在した。これらは当初、奴隷的なイメージをもって捉えられてきたが、インカ王パチャクティのパナカ（ハトゥン・アイユ）の財産の一つであるマチュピチュ出土の人骨の形質人類学的分析では、そのイメージが覆されている。マチュピチュ出土の人骨は総数 174 体で、この内 20 体は 15 歳未満の子供である。この構成比は、一般社会とほぼ同じで、複数の社会から集められた労働者集団が、子供を伴って健康的に日常的な生活を送っていたと推察されている［Burger 2004］。

参考文献

大平秀一

2003 『エクアドル南部のインカ帝国に関する実証的研究』 2001-2002 年度科学研究費補助金基盤 C(2)成果報告書。

2004 「エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査（第 1 次）」『古代アメリカ』第 7 号、85-90 頁。

2005a 「インカ国家の行政センター・エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査（第 2 次）」、『古代アメリカ』第 8 号、31-39 頁。

2005b 「インカ国家における人間の犠牲：ボルボラ・バハ遺跡の墓をめぐって」『マヤとインカ：王権の成立と展開』（貞末堯司編）、279～298 頁、同成社。

2006 「インカ国家の行政センター・エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査（第 3 次）」、『古代アメリカ』第 9 号、55-63 頁。

2008a 『インカ国家とエクアドル南海岸部の関係をめぐる実証的研究』平成 15～18 年度科学研究費補助金［基盤研究(B)，海外学術調査］研究成果報告書。

2008b 「インカ北方領域における武力抗争」『他者の帝国:インカはいかにして「帝国」となったか』（関雄二・染田秀藤編）、226-246 頁、世界思想社。

Burger, Richard L.

2004 Scientific Insights into Daily life at Machu Pichu. *Machu Picchu: Unveiling the Mystery of the Incas*. (Richard L. Burger and Lucy C. Salazar eds.) pp.85-106, Yale University Press.

Cieza de Leon

1943 *Del señorío de los Incas (2a. parte de la Crónica del Perú)* [1553]. Alberto Maria Salas, ed., Ediciones Argentinos “Solar”. Buenos Aires.

Odaira Shuichi

1999 Un Aspecto del Control Inca en la Costa sur del Ecuador: una evidencia encontrada en Mirador de Mullupungo. *Tawantinsuyu:an international jounal of inka studies*, Vol.5, pp.145-152.

2005 Expansión Inca al Oeste de Tomebamba: Nuevos Datos Arqueológicos entre la Sierra y la Costa Ecuatoriana. *XAMA. Publicación de la Unidad de Antropología*. vol.15-18, pp.61-72, Instituto de Ciencias Humanas, Sociales y Ambientes (INCIHUSA), Mendoza, Argentina.

2009 La Capac hucha en Ecuador: Imagen y Realidad del Sacrificio Humano en Los Incas. *Miradas al Tahuantinsuyo: Aproximaciones de Peruanistas japoneses al Imperio de los Incas*. (Someda Hidefuji y Seki Yuji eds.) pp.159-188, Fondo Editorial, Pontificia Universidad Católica del Perú.

原稿受領日　2013年９月25日
原稿採択決定日　2013年10月16日